Climb
クライム

川野小児医学奨学財団
2022年度 事業報告書

みんなで
のりこえる。

みんなでのりこえる。

川野小児医学奨学財団は、病気で息子を亡くした父親の
「病に苦しむ子どもを減らしたい」という思いからはじまりました。
1989年に設立され、30年以上にわたって、
小児医学の支援に取り組んでいます。

子どもの病気に関する研究への助成や、
小児科医を目指す医学生への奨学金給付、
小児医療施設のサポートなどに取り組むなかで感じてきたのは、
子どもをとりまく問題の解決には社会全体の力が必要だということです。
医学が進歩し、乳幼児の死亡率は減っていますが、
いまだ解明されない小児の難病の存在や
特別なケアが必要な子どもの増加など問題は尽きません。

さまざまな立場や役割の人たちといっしょに、
子どもたちが直面している問題を、みんなでのりこえる。
私たちは一歩ずつ、歩みをすすめてまいります。

interview

子どもの心の声に触れて見えてきたこと

ハナ（母）　カズ（息子）

「周りを見回しても、私たちほどいい関係をつくれている親子はいないと思います」。カズ君（仮名）との関係を笑顔で話すハナさん（仮名）。

カズ君は現在高校生。友人たちからの信頼も厚く、何事にも熱心に取り組む「自慢の息子」だ。

しかし以前、ハナさんはカズ君が激しく暴れることに悩まされ続けていた。「この子に殺されるかもしれない」と怯え続ける毎日を過ごしていたのだ。

カズ君は幼いころから激しく暴れることがあった。例えば、保育園から帰る道が思っていたルートではないと大声で叫び、ハナさんを叩いたり蹴ったりする。朝、目が覚めた時に横にハナさんがいないと、パニック状態になり、白目を剥きながら「もう一回夜に戻せ!」と叫び続ける。食事に嫌いなものが入っていたら、「こんなの食べられない」とお皿ごと投げる。小さなことが思い通りにならないと、家中のものをなぎ倒したり、水浸しにすることもあった。

殺人事件のニュースを見ると、人ごととは思えかった。「私も寝ている間に殺されるんじゃないかって」。実際に包丁が出たこともあった。

困っていろいろなところに相談に行ったが、状況は改善されない。病院に通院して何種類かの薬も試したが、飲ませても変わらない。それまでで一番ひどく荒れた時に、すがる思いで電話をしたのが、「四国こどもとおとなの医療センター児童心療内科」だった。

ここでは、暴れる子どもを「親と子の関係性」という側面から診療し、母親を対象とした治療プログラム（以下プログラム）を行っている。

ハナさんは本能的に、「このプログラムに挑戦したい」と思ったという。

プログラムを主催する牛田美幸医師が、最初の診察の際に言ったことで印象に残っていることがある。「普通の子どもは24時間のうちのほとんどをおだやかな気持ちで過ごしますが、うまくいっていない子どもは多くの時間を傷ついた嫌な気持ちで過ごしています。あなたも傷つくことがたくさんあった時、ささいなことにカッとなってしまったりしませんか？それは子どもも一緒ですよ」。

この言葉はハナさんにスッと入ってきた。「もし周りから嫌なことを言われ続けて、毎日傷つくことがたくさんあったら、私だって子どもがコップの水をこぼしたくらいでどなりつけてしまうかもしれない」。そして同時に、こうも思った。「今まで、カズは生まれつきカッとなりやすいのだからどうしようもないと思っていたけれど、私が状況を変えることでカズも変わるのかもしれない」と。

プログラムの最初にやったのが、子どもとの印象的なやりとりを書くことだった。状況を文字にしてみると、気づきがたくさんあった。自分は被害者だと思って書く中にも、「私が余計なひと言を発しているな」と感じるものが多かったのだ。そして、何より大きかったのが、自分と子どもの気持ちが見えるようになってきたこと。「あの時ママ友に言われた言葉に私は傷ついていたんだなとか、あの時カズは妹にやきもちを焼いていたんだなとか」。

もう1つ、取り組んだのが「させるをやめる」だ。例えば、ハナさんは食べ物の好き嫌いは許さず、嫌いなものは好きなものの中に混ぜて食べさせていた。また、宿題や学校の準備は18時までに済ませることや、メディアは1日30分だけと決めていた。それ以上見ていると、カッとなって、テレビをバンと叩いたこともある。決めたことをきちんと守らせるのが親としての当然の責任だと思っていたからだ。

しかし、牛田医師から「それはやめよう」と言われた。「いったん親がやれと言うと、子どもがそれをやらなかった時に腹が立つ。引っ込みがつかなくなって、ますます強く叱責することになり、最後にはどなりつけることにもつながってしまうから」と。

正直、最初は「今これだけ言ってもよくならないのに、私が何も言わなくなったら、事態は余計に悪くなるんじゃないか。子どもが堕落して何もしなくなるのではないか、えらそうな態度をとられるのではないか」と心配だったと振り返るハナさん。それでも恐る恐る「させるをやめる」を始めたのは、あまりに日常が大変だったのでもうやるしかなかったからだ。

小言や叱責のない生活をし始めてしばらくすると、カズ君に変化があらわれた。暴れることがぐっと減ったのである。いつもだったら癇癪（かんしゃく）を起こしていたことにも癇癪を起さなくなった。堕落したり、えらそうになるなど、「恐れていたこと」は何も起こらなかった。

さらに、大きな変化が見えた出来事があった。ある日、学校から帰ってくるなり、カズ君が「友達を殴ってしまった」と話し始めたのだ。これまでであれば、「どうしてそんなことを!」と問い詰めていたに違いなかったが、プログラムで教わったように、質問せずに子どもが言いたいことを聴いてみようと耳を傾けた。そうすると、「僕が悪かったのかな」「謝りたいから友達のところに連れていってほしい」などと口にし始める。

そして「僕、どうしてこんなことしちゃうんだろう…」と悲しそうに言ってきたのだ。

「びっくりしました。今までカズは自分の非を認めたことがなかったので…。この子は善悪の判断がつかない子だから、やってはいけないことや謝ることを教えなきゃと強く思っていたのに、ちゃんと知っていたんだなって。もしかしたら、この子は良い子なのかもしれないと思いましたね」。

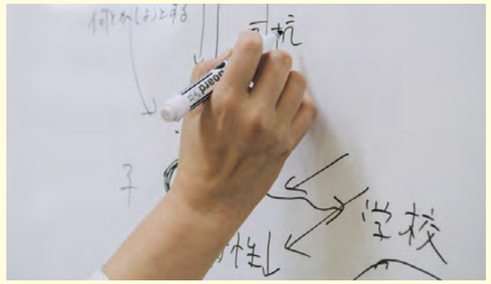
それからも、ただただカズ君の話を聴くことを心掛けたハナさん。すると少しずつ、カズ君は手を出すのではなく、言葉で自分の気持ちを伝えてくれるようになった。やがて癇癪を起こしたり、暴れる姿が想像できないくらい落ち着き始める。半年が経った頃には、「もう大丈夫」と思えるようになった。

6ヶ月間のプログラムを振り返り、ハナさんが1つ学んだことがある。「子どもには心がある」ということだ。当然、子どもにも感情もあれば、意思もある。
「言っても言うことをきかない時、子どもがどうしてやらないのかが分からなかった」とハナさん。能力がないのか、やり方を知らないのか。それとも、それが障害なのかと思ったこともあった。

「子どもに心があることは当たり前のことなのに、自分が苦しかった時はそれを忘れてしまっていたんです。言ってもやらないとか、叩いてくるとか、行動ばかりに気を取られ、その奥にある心を見ることができていませんでした」。

カズ君がひどく暴れていた時、ハナさんは子どものことが怖く、どう接したらいいか分からなかった。「子どものことを、自分の手には余る大きなトゲトゲのついたモンスターだと思っていた」と振り返る。

「でも、プログラム中にモンスターの背中のチャックをそっと開けて、中を垣間見られた瞬間があったんです。そこには、今まで見たことがないような小さくて弱い、震えている本当の子どもがいました。もっとお母さんに好かれたい、愛してほしい、より良くなりたい、そんなふうに思っている子どもが、最後にはモンスターの皮を脱いで出てきた。やっと本当の子どもに出会えた…そんな感じがしているんです」。



図式化しながら説明する牛田医師

専用の書類棚

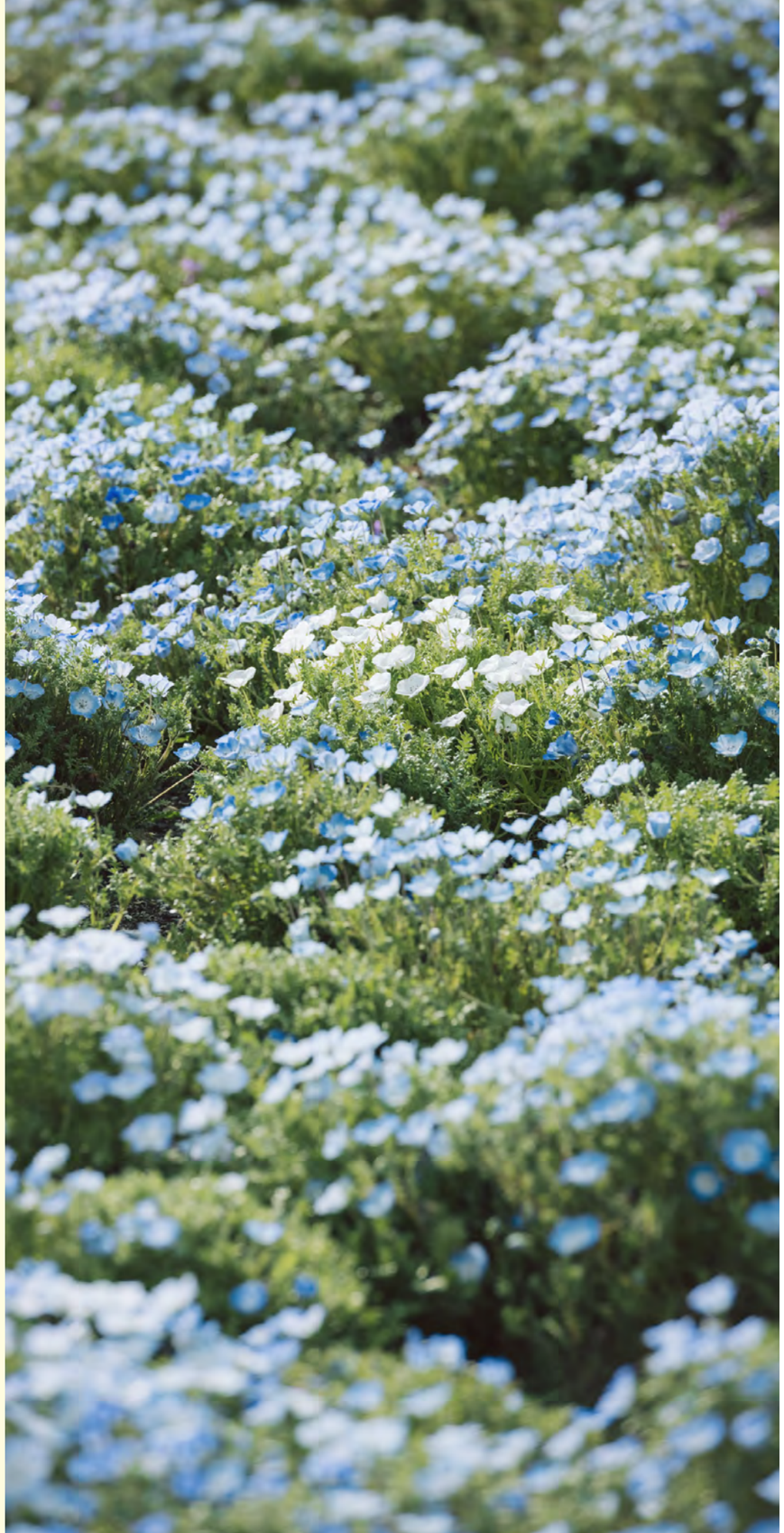
牛田医師は次のように言う。「子どもが問題行動を起こした時、大人は、子ども“個人”の中に原因を見出そうとします。しかし、原因は子ども“個人”というより、子どもにも心があることをうっかり忘れてしまった私たち大人と、子どもとの“関係”にあるのかもしれません」。

この視点こそが、今、私たち大人に必要とされているものなのかもしれない。

※写真内の親子はモデルです。

牛田 美幸 先生
国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター 児童心療内科医長

1991年高知医科大学医学部（現高知大学医学部）卒。その後、高知医科大学医学部附属病院、国立療養所香川小児病院、国立善通寺病院に勤務。2007年より国立病院機構香川小児病院。2010年より同院児童心療内科医長。2013年病院統合に伴い現職。



Annual Report 2022